

本報告は未定稿です。万が一引用の場合はメールで  
ご相談ください(researchmap掲載に当たり追記)

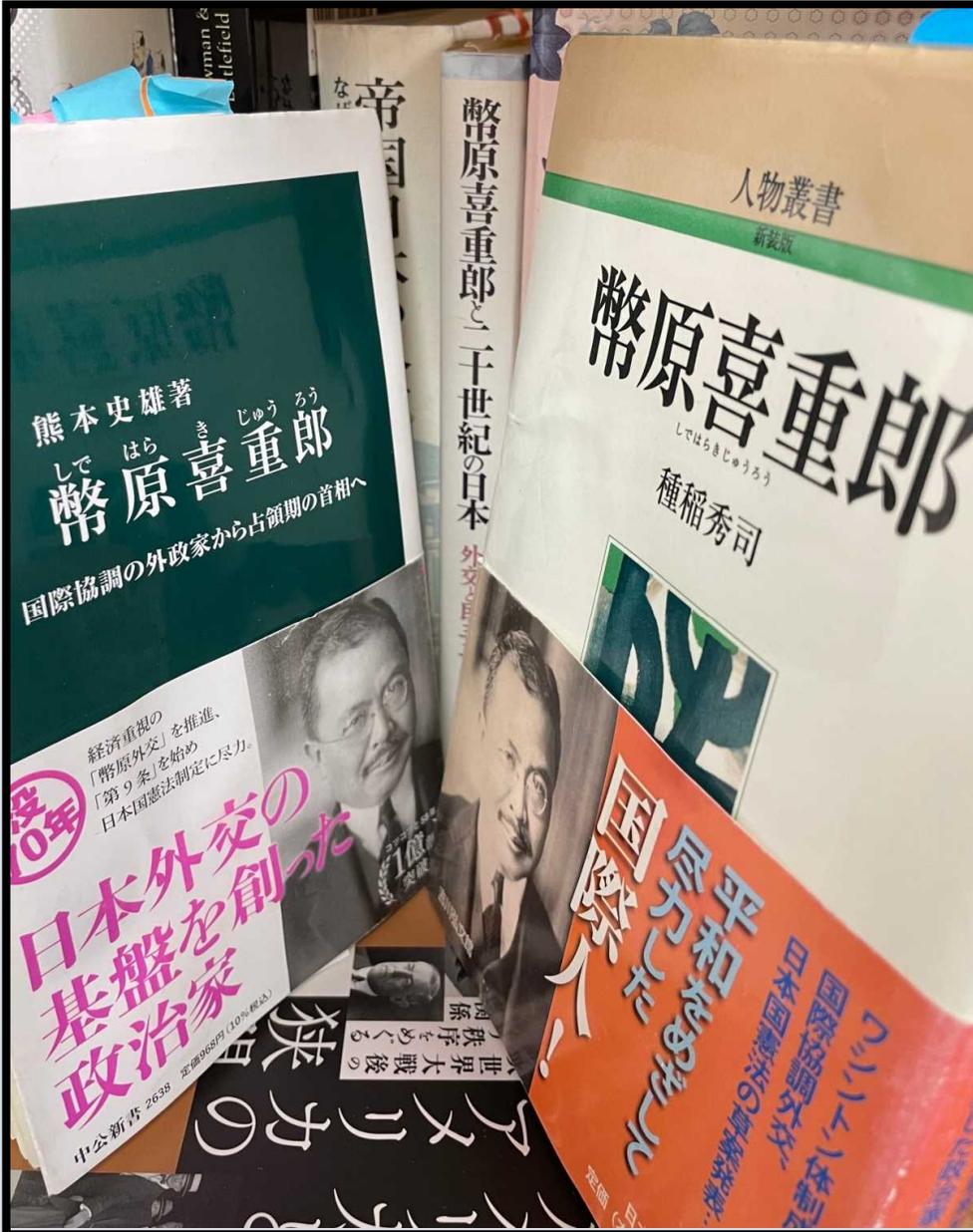
[書評報告1]  
種稻秀司 『幣原喜重郎』  
吉川弘文館、2021年  
熊本史雄 『幣原喜重郎』  
中央公論新社、2021年  
——その意義と論点

中谷直司（帝京大学文学部社会学科）

メールアドレスはresearchmap内にあり（ログイン必要）

東アジア近代史学会第206回研究例会

2021年12月11日（土）



# 1. 研究者の手になる伝記が3冊

---

①**服部龍二**『幣原喜重郎』（2006・2017）：日米関係史と政党政治史のなかの幣原喜重郎  
⇒幣原個人だけでなく、部下、米英の外交官、他の関係閣僚などの視点も多い

②**種稻**：未使用資料の渉猟⇒幣原平和財団『幣原喜重郎』の幣原像も一部修正（驚き！）

③**熊本**：外務省の文書処理過程に注目⇒幣原の組織的リーダーシップの「逆説」を活写

## ・そのほかの代表的な研究（幣原外交の研究）

①**馬場伸也**『満洲事変への道』（1972）：幣原外交vs田中外交の明確な対比

②**佐古丞**『未完の経済外交』（2002）：戦後の経済中心外交を先取りした外政治家

③**西田敏宏**の一連の論文：日本中心のワシントン体制を目指した幣原

## 2. 種稲『幣原喜重郎』の特長

---

・『近代日本外交と「死活的利益」』（2014）をはじめとした自身の研究に基づきつつ……

(1)『外交五十年』と公式伝記からも漏れていた非公文資料が多数

人物伝としてとても面白い！

+公式伝記の記述でも資料がなければ「分からない」と書く（すごい！）

(2)幣原外交論の強力な復活：しかし「現実主義者」として

正確には新外交という「理想」と、東アジアの国際政治・日本国内の政党政治という「現実」の「間に深いギャップがあることを誰よりも熟知」する外政家・政治家として（286頁）。

(3)国際法学の知見を伝統的な外交史に見事に接続

集団安全保障と戦争違法化⇔死活的（枢要なる）利益⇔満蒙權益重視の幣原外交

# 3. 熊本『幣原喜重郎』の特長

---

自身が精力的に発表していた次官・外相期の組織管理の論文に立脚しつつ……

(1)新書（一般書）にもかかわらず文書処理過程の分析を軸とする：しかも分かりやすい！

Cf. 熊本『近代日本の外交史料を読む』（2020）

(2)幣原外交はなかったと宣言！：「霞ヶ関の正統外交政策」の継続＋「逆説としての外務大臣」

①次官期：小村欣一の満蒙供出論を勢力圏外交よりに修正⇒列挙主義で問題解決を主導

②外相期：幣原派は通商局に限られる⇒地域主義を志向する亜細亜局（アジア派）に接近

(3)満蒙権益と対英米協調を基軸とする霞ヶ関外交の継続を力強く主張

（予感はしていたがここまでは！評者にとっては大打撃……）

⇔熊本『大戦間期の対中国文化外交』（2013）との関係が気になるが……。

## 4. 種稻・熊本の共通点・相互補完

---

・厚みのある資料実証的な伝記研究であることを前提に……

(1) **第一次大戦とパリ講和会議・ワシントン会議を契機とする日本外交の転換を事実上否定**

\* 最近の主流的見解に一致する内容（評者にとってはやはり大打撃！？）

(2) **満蒙権益を重視する外政家・幣原の強調**（満蒙権益の範囲はそこまで明確ではないが）

\* 研究潮流の再修正？（中国「本土」を軽視したという意味ではないが）

(3) **外務官僚にとどまらない幣原像は種稻が、組織管理者としての幣原像は熊本が大きく更新**

⇒ 国際関係史を軸とする服部とあわせ、3冊とも読まれべし（後発研究は大変！）

(4) もちろん「平和憲法」をめぐる議論でも両者は整合的（細部は分からないが……）。

# 5. 種稲・熊本の相違点・矛盾点

---

- (1)外相期のリーダーシップ評価は対照的：とくに亜細亜局・アジア派との関係
- (2)田中外交との対比にもやや温度差あり：熊本の方が基本方針の一致をより強調
- (3)叙述スタイルは対照的か：「分からない」と書く種稲と大胆な心情描写を挿入する熊本  
資料の使い方も：新聞・雑誌記事・関係者の回想を文字どおり渉猟した種稲  
外務省記録の文書処理過程の分析に集中した熊本
- (4)類型化の温度差：幣原派vsアジア派では熊本が、現実主義vs理想主義では種稲が強力  
「幣原は容易に本心を明かす人物ではなく、平和主義者というイメージだけが先行している」  
(種稲、はしがき9頁) ⇒現実主義者・幣原の強調  
  
「それゆえ、『幣原外交』という既存の枠組みや通説めいた評価、『現実主義』『理想主義』  
といった概念をア・プリオリに措定して、そこに彼の思想や行動を当てはめることは控えた」  
(熊本、262頁) ⇒組織内分析を軸に政策派閥の強調

# 論点①：集団安保・不戦条約との距離は 【種稲】 東アジアで意味を持ったか

---

**(1)両者が東アジア国際政治の焦点となった場面はなかったのでは？（満洲事変まで）**

大きな論点は中国の地位向上では？（勢力範囲の撤廃⇒ついで国権回復）

\* 東アジアが遅れているとも、進んでいるとも言える

\* \* 米の連盟不参加も初期条件を大きく変えた

**(2)集団安保・不戦条約との距離は、「新外交」への接近をはかる尺度にならないのでは？**

比較すべきはヨーロッパ外での欧州大国の行動や方針？

# 論点②：理想主義者はいたのか

## 【種稻】

---

(1)戦間期のほとんどの外交官は、幣原と同じように「狭間」に生きたのではないか？

例：連盟派は理想主義者だったのか、あるいは職責がそうさせただけか？

英仏米の外交官は、幣原よりも常に理想主義者だったのか？

(2)現実主義と対比されている「理想主義」とは何か？

一般に流布している「平和主義者・幣原」？（研究者の間ではすでに克服？）

\* リベラリストか現実主義者かでは答えは変わってくる？

（国際政治学のいう「リアリスト」には見えない）

# 論点③：「死活的（枢要なる）利益」は 【種稻】 意図通りに受けとられたか

---

## (1)「枢要なる利益」と裏腹に日本の満蒙權益は後退したのでは？

枢要なる利益への「一般的保障」に対して、ワシントン会議の日本全権団は：

「右は何等特殊の権利を日本に付与せらる可きことを確認せるものとは言ひ難く、現に当時帝国政府に於ても……支那国民正当なる志望並該地方に於ける列国の利益を無視し、何等地理的区画を設けて経済上の利益を壟断し、或は政治上排他的権利を主張し、所謂勢力範囲主義を確保せんとする動機に出でたるものに非ざる旨を声明せる次第にして、要するに我が主張の根本義は、予て門戸開放機会均等の鉄則に画然たる除外例を設けんとするの趣旨に非ず」（下線等は中谷）

## (2)次官や局長を含む下僚と比べて、幣原の満蒙權益観が孤立していた可能性はないか？

Cf.華府会議直前の南満洲權益早期返還論；20年代後半の併行線禁止規定の空権化etc

# 論点④：超党派外交の条件は何か

## 【種稻】

---

### ・服部『幣原喜重郎』の回答：政党政治、マスメディア、世論の「成熟」

成熟は確かに必要条件だろうが……（第8章最終節と終章末尾の叙述はとくに印象的）

⇒しかし英国のBrexitの混乱は？英国は成熟を超えて腐ったのか？（いや、まさか）

⇒超党派外交と外交の政争化が入りまじる米政治は、永遠に未成熟のままか？

### (1)政争は水際まで：基本的「世界観」を共有しない政党同士に可能か？

\* 価値観の分裂・分極化は、必ずしも政治的未成熟とイコールではない

### (2)定期的な政権交代は問題緩和の作用を持つだろうか？（あるいは悪化させるだろうか）

\* 米国を見ていると安心できないが……。

# 論点①：次官期と外相期の対比は適切か

## 【熊本】

---

### (1)次官期：新四国借款団交渉の決着は幣原の大使転任後

決め手：列挙主義ではなく「枢要なる利益」の承認（中谷『強いアメリカと弱いアメリカの狭間で』[2016]）  
⇒それでも転任前の幣原の基本方針が一貫したとみるべきか？  
\* かつ認定権（事実上の拒否権）は米側が激しく反発、拒絶。

### (2)外相期：組織ではなく問題の困難さがリーダーシップを制約したのではないか（論点②へ）

第一期：中国の政情不安定；第二期：国民党政府の北伐完成と革命外交  
+ 国内の政党政治（幣原による長期の外交指導の基盤でもあったが[服部、2006・17]）

### (3)日英同盟（に代表される勢力圏外交）を失いながら、「霞ヶ関の正統外交政策」は可能か？ 幣原の意図がそうであったとしても、不可能では？（手段がない）

### (4)基本方針が一致しながら、幣原が「田中外交」を厳しく批判したのはなぜか？ （1つの理由は党派性orセクショナリズム？しかし両書の幣原像からはややズレる） 近年の研究を含め、一致点を強調しすぎてきた可能性は？（外務省の同質性はともかく）

# 論点②：アジア派は存在したのか

## 【熊本】

---

(1)「**亜細亜局モンロー主義**」は地域主義志向の政策派閥の成立を意味しないのでは？

(著者は重々承知だと思うが)

小村欣一政務局第一課長以来の系譜の中で、亜細亜局はどこで変質したのか？ (特定を)

(2)満洲事変直前の大規模な人事刷新がなぜ可能だったのか？幣原・谷・重光の握手の意味は？

種稲も：「谷は幣原に育てられたと自任する幣原の直系……、守島も幣原の腹心である出淵勝次の下で在独・米大使館に勤務した幣原・出淵ラインの直系で、亜細亜局の局員のほとんどが幣原の支持者であった。谷や白鳥……がアジア派・革新派（反欧米派）に転じたのは満洲事変の勃発後で、幣原は信頼できるメンバーを側近に集めたのである」（149頁）。

⇒幣原は省内を十分に掌握しながら、困難な国際環境と国内政治の前に挫折したのではないか？

# 論点③：戦後平和主義をどう見るか

## 【熊本】

---

「日本国民は、日本国憲法の平和主義の精神を遵守することによって、幣原亡き後の壮大な芝居に込められた彼の精神を継受している。その精神とは撤退した平和追求にほかならない」（259頁）

- (1) 「終わらない芝居」との印象的な小見出し……日米同盟の成立と以後の改定・機能強化、自衛隊の発足と拡充・定着、PKO参加、イラク戦争での後方支援、集団的自衛権の（一部）行使容認など、幣原時代と条件は変わってきているが、われわれがいまも続ける「芝居」とは？
- (2) 種稲が重視する集団安全保障や戦争の違法化との関係で、戦後日本の「芝居」を評価すればどうなるか？

# 論点④：大胆な心情描写の理由は？

## 【熊本】（まことに野暮を承知で…）

---

「八月一五日の終戦の詔勅を、幣原はただ静かな心持ちで聴いた。〔改行〕倶楽部になどもう居る気もしない。戦争は終わったのだ、ただそのことだけをぼんやりと反芻しながら、幣原は倶楽部を出た。頭上から太陽が照りつけていた。暑い午後だった。夏の白い日差しを浴びながら幣原は家路についた。」（熊本、194頁）

「幣原は涙ながらに昭和天皇の玉音の放送を拝聴した。その様子を一年後に語っている……。それによると、所用で丸の内方面（幣原の手帳から外務省と思われる）を訪れたあと、日本倶楽部で玉音放送を聞いたというが、泣き叫ぶ男の話は出てこない。」（種稲、194頁）

「ここで幣原は玉音放送を耳にすると、『皇軍の無条件降伏は実に痛恨極まりなく、電波放送に由る詔勅の玉音を肅聴して思はず落涙』した。あまりの出来事に、幣原は足早に炎天下を帰宅した。そして謹慎する。」（服部、213頁）

【了】